

2015年7月31日（金）3校目

上演8

香川県 丸亀高等学校

「用務員コンドウタケシ」

第39回全国高等学校総合文化祭

第61回全国高等学校演劇大会

講評速報

生徒講評委員会 担当委員

石田 陽（賢明女子学院高等学校・兵庫県）

木村 吏那（滋賀県立守山高等学校）

井上 涼太（滋賀県立甲西高等学校）

私たちは、応援されることで支えられている。そして、誰かを応援したいと思わせてくれる劇だった。

応援団の引き継ぎ式の準備の中、貯金箱がない、ずっと使われてきた太鼓のバチがないという事件が起こる。どうにか隠し通して引き継ぎ式をやろうとする部員たち。次第に誰が団長を引き継ぐか、という話題になる。団長は男という伝統があるため、女子しかいない2年生2人は団長になることができず、1年生の男子2人のどちらかがなることに決まっていた。仕方がないと黙っていたものの、どこか納得ができない部員たち。それは、引退する3年生の女子も感じていたことだった。どうにか団長の話を延ばそうとして、話題を用務員コンドウタケシへとそらす。

幕が上がると照明で区切られた四角い空間が応援団の部室を浮かび上がらせていた。狭い空間で繰り広げられる演技は、応援団ならではのオーバーな動きで観客を楽しませ、飽きさせなかった。

自転車通勤、いい体格、スキンヘッド、ちょっとしたことで注意をする、生徒思い…など、様々なコンドウタケシ像が出てくる。コンドウタケシは舞台には登場しない。そのため、観客も一緒になって、コンドウタケシとはどんな人なのか、まるでパズルのピースが合わさっていくかのように考えることができた。「生理的に無理」など表面的な所だけで想像する発言があり、“偏見”が私達の中にもあることに気づかせられた。

伝統を受け継ぐということは確かに大切だが、伝統は時代とともに変わりゆくもので、社会にあわせて変化させないと失われる可能性があるものでもある。固定観念にとらわれず、想いをつなぐことが大切ではないかという意見もあった。伝統についての議論にもなった。

最初は話のつながりでしかなかったコンドウタケシだが、話すにつれて“実は応援してくれていた”“応援団長だった”ということが分かり、終わりに近づくと応援部にとって身近な存在となっていた。支えをもらうことで、誰かに助けられることで活動ができていると自覚する部員たち。その姿を見て、私達にも支えという存在があることに気づいた。

ラストの演舞は非常に素晴らしいものだった。一生懸命な表情、会場に響き渡る太鼓の音、一糸乱れぬ動き。心がひとつになることで、太鼓の音がなくても動きがそろう。誰かを応援しようとする熱い想いが上手く表現されていて、思わず涙が出るほどの感動と迫力があつた。

今しかないからこそ全身全霊で何かをやり遂げる情熱が伝わってくる、まさに青春そのもの。私たちは演劇部だが部活に対する思いは同じだった。

